

幼児のボディコンタクトを伴う遊びに関する研究Ⅱ

——親のボディコンタクトに関する意識調査を中心として——

宮 下 恭 子
蒲 真 理 子

目次

- I はじめに
- II 方法
 - 1 調査方法と内容
 - 2 調査対象
 - 3 調査期日
- III 結果と考察
 - 1 親のボディコンタクトに関する意識と親子のかかわり方
 - 2 家庭における子どもの遊び
 - 3 子どものボディコンタクト要求に対する親の対応の仕方から見た親子間のボディコンタクト
 - 4 子どものボディコンタクト要求に対する親の対応の仕方から見た子どもの遊び
- IV まとめ
- V 参考文献

I はじめに

幼少時期における親子のスキンシップは誰もが一様に大切に、重要な行為であると認識している。それは、身体的な接触から得られる心理的作用、すなわち情緒の安定や、円満な人間関係の形成などに深く関与する行為であり、それに関してさまざまな研究がなされており、また育児関係書には必須の言葉として登場している。筆者らも、幼少時期における親子のスキンシップは子どもの成長、発達に欠くことのできない行為として受け止め、特に幼少児期における遊びの中で展開される身体接触行為に注目し研究を進めている。

ところでbody contact (身体的接触) という語は、触れる (touching)、愛撫する (handling)、抱きしめる (holding) などのように表現されている皮膚の触覚機能と密接に関係のある経験の総称として用いられている¹⁾。通常このような行為はスキンシップ (skinship) という言葉で表現されることが多いが、これは和製英語として誕生し、未だ研究の用語として定着していないので、筆者らは先行の研究²⁾を進めるにあたり平井³⁾らの研究を参考にボディコンタクトという言葉を使用することにした。

筆者らは、先行の研究において現在短期大学に在学中の女子学生を対象としたボディコンタクトの調査を行い次のような結論を得た。すなわち、①幼少児期に親から受けたボディコンタクトの種類では「だっこ」や「おんぶ」が多く、「からだを強く抱きしめられた」や「ほおやひたいにキスされた」は少なかった ②ボディコンタクトを伴う遊びの経験はかなりある ③幼少時期に行ったボディコンタクトのある遊びにおいて、社交、友好、協力、協調などの意味を見出している ④現在ボディコンタクトのある活動を行った場合、自他のからだへの気づきを感じる ⑤その活動直後はと

でも気持ちよく感じる ⑦ボディコンタクトを伴う活動を肯定的に思う人が多い、などであった。

そこで、今回は幼稚園児が家庭にいるとき、親子間でどのようなボディコンタクトが行われているか、それに対する親の意識、さらに子どもの遊びなどについて調査し、親子間で行われるボディコンタクトの実態を明らかにするとともに、子どもの遊びの現状から、幼児期におけるボディコンタクトの意義を検証することにした。また、今回の調査結果から幼児教育におけるボディコンタクトを伴う遊びの検証や今後の指導に役立てるための基礎資料を作成する。

II 方法

1 調査の方法と内容

次の調査内容に対して、選択および数値記入、自由記述による回答を求めたアンケート調査を実施した。なお、ボディコンタクトに関する質問項目において使用した言葉は、「ボディコンタクト」よりも一般的に認知度の高く、理解されやすい「スキンシップ」という言葉を使用した。

〔調査内容〕

1. 子（園児）のプロフィール（年齢、性、家族数、兄弟の有無）
2. 子の生活習慣について（起床・就寝時間、食事、おやつ、排便、体力、遊びの傾向）
3. 親のボディコンタクトに関する意識
4. 親が子に対して行うボディコンタクト（母から子へ、父から子へ）
5. 子が親に求めるボディコンタクト（子から母へ、子から父へ）
6. 家庭での遊びについて（遊びの種類と経験、遊び相手、遊ぶ人数、友だちのできやすさ、遊び場所、外遊びと室内遊びの志向、習い事）

2 調査対象

東京都内 2 園および金沢市 3 園の幼稚園児の保護者 合計1091名

内訳 年少児 331名(女児163名 男児168名)

年中児 390名(女児194名 男児196名)

年長児 370名(女児198名 男児172名)

3 調査期日

2001年7月上旬

III 結果と考察

調査内容についての全回答は対象者の年齢や男女の差異を考慮して、各年齢の男女ごとに集計（以下、各年齢の男女別とする）、年齢ごとの集計（以下、年齢別とする）、全対象の男女ごとに集計（以下、男女別とする）、全対象を一括して集計（以下、全体とする）した。その結果、ほとんどの調査項目において各年齢の男女別や年齢別、男女別には同様の傾向が見られ χ^2 検定において有意差は認められなかったため、結果と考察は、年齢別、男女別、全体について行う。

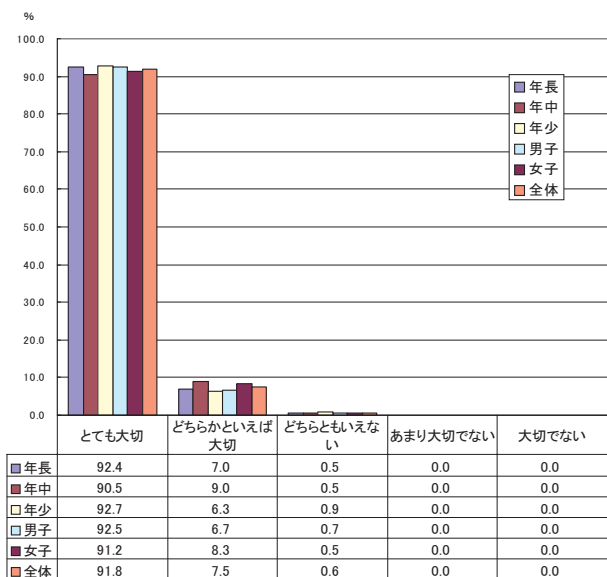
1 親のボディコンタクトに関する意識と親子のかかわり方

（1）親のボディコンタクトの意識

家族と子どもの肌を触れあい（スキンシップ）について、「とても大切」から「大切でない」までの 5 選択肢で回答を求めた結果を図 1 に示す。90%以上の親が「とても大切」と回答しており、

「どちらかといえば大切」という人を合わせると98%以上の親が大切と回答した。したがって、子どもの年齢や男女の関係なくどの親も一様に子どもとのボディコンタクトは大切と考えていることが確認できた。

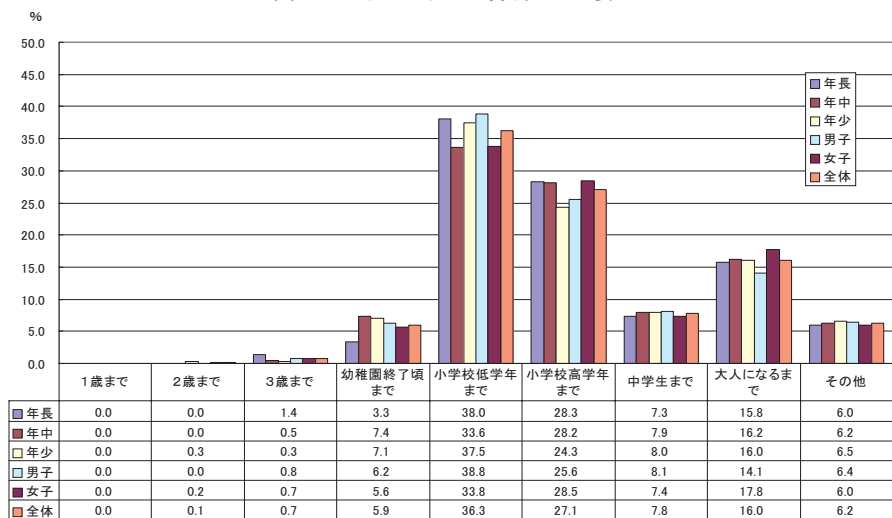
図1 スキンシップは大切か



(2) ボディコンタクトが必要な年齢

子どもとのスキンシップが必要な年齢について、「1歳まで」から「大人になるまで」の8選択肢の中から回答を求めた結果を図2に示す。年齢別、男女別のどちらも「小学校低学年まで」との回答が多く、次いで「小学校高学年まで」であった。両者を合わせると全体で63.4%の親は子どもが小学生の間は必要と考えているようである。また、「大人になるまで必要」と考える人も比較的多く、特に女兒の親は年少ほど多く(年少19.3%、年中18.7%、年長15.7%)、逆に男児の親は年少ほど少ない(年少12.8%、年中13.8%、年長15.8%)。

図2 スキンシップは何歳まで必要か



(3) 親が子どもによくするボディコンタクト

父母が子どもによくするしぐさについて、「頭をなでる」を始めとする11の選択肢(図中に記載)の中から該当する回答を複数求めた結果を図3, 図4に示す。母親の場合, 「手を握る」, 「頭をなでる」, 「ひざにのせる」, 「からだを抱きしめる」, 「だっこをする」の回答が多く見られた。父親の場合「ひざにのせる」, 「だっこをする」, 「頭をなでる」, 「からだを支える遊びをする」の回答が多く見られた。父母間の違いについて, 父親に多いが母親には少ないしぐさは「子どもを支えるあそび」, 「肩ぐるまをする」であった。また, 父親より母親の方に目立つしぐさは「からだを抱きしめる」, 「ほおやひたい(顔)にキスする」, 「肩や背中をなでる(からだをさする)」, 「手をにぎる」, 「ほおや顔を撫でる」であった。

図3 母親が子どもにするしぐさ

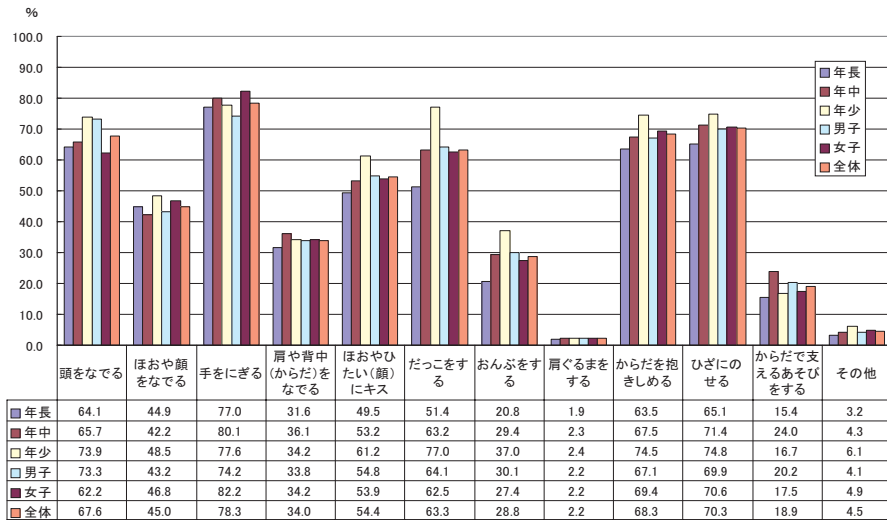
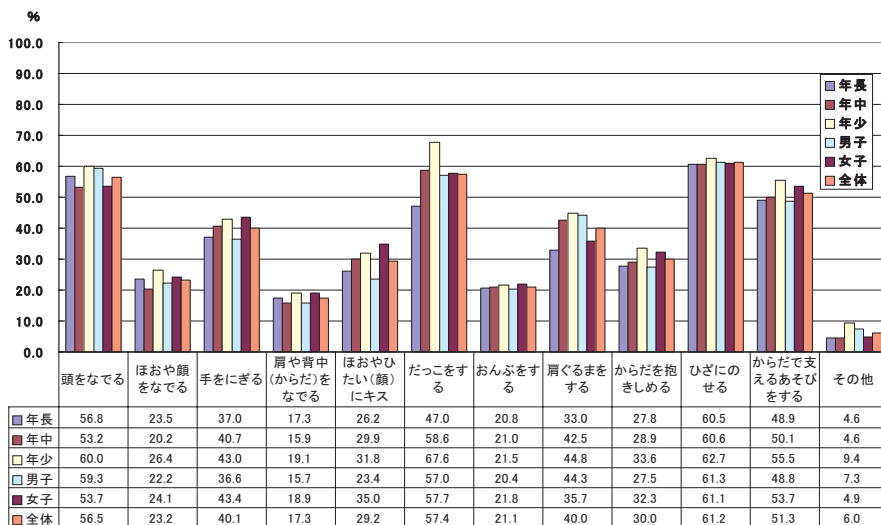


図4 父親が子どもにするしぐさ



(4) 子どもが親に求めるボディコンタクト

子どもが父母に求めるボディコンタクトについて, 「からだにくっついてくる」を始めとする10の選択肢(図中に記載)の中から該当する回答を複数求めた結果を図5, 図6に示す。母親に対して,

「からだにくっついてくる」、「ひざの上ののってくる」、「手をつなぎにくる」、「だっこしてという」、「抱きついてくる」が多い。父親に対しては「ひざの上ののってくる」、「からだを支えるあそびをしてほしいという」、「だっこしてという」、「からだにくっついてくる」が多い。父母に対しての要求の違いで顕著なものは「からだを支えるあそび」（母へ6.4%～10.8%，父へ17.1%～21.6%）や「肩ぐるま」（母へ0.6%～1.4%，父へ10.3%～13.3%）である。

図5 子どもが母親に求めるしぐさ

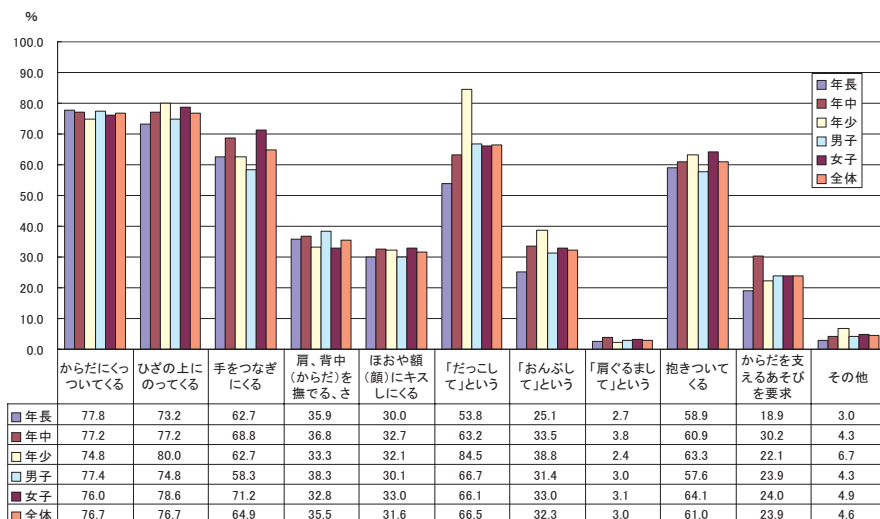
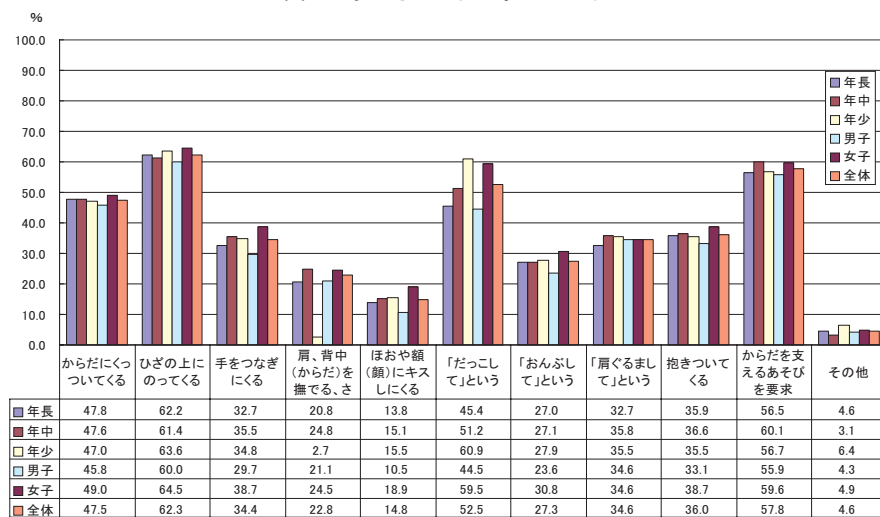


図6 子どもが父親に求めるしぐさ

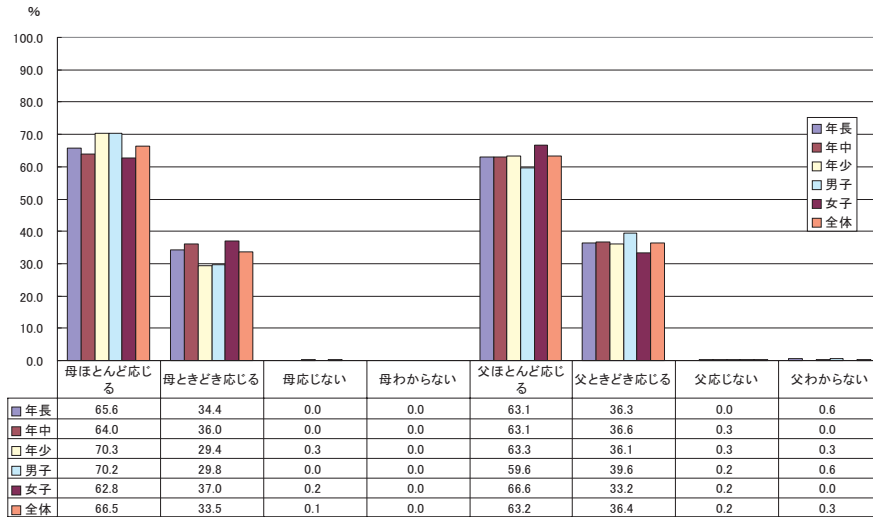


(5) 子どものボディコンタクト要求に対する父母の対応

子どもが父母にボディコンタクトを求めたときの父母の対応の仕方について、「ほとんど応じる」を始めとする4つの選択肢(図中に記載)の中から該当する回答を求めた結果を図7に示す。もっとも多い回答は父母共に「ほとんど応じる」が60%以上あり、「ときどき応じる」も含めると、ほとんどの人が子どもの要求には応じていることがわかる。しかし父母の対応の仕方と子どもの性の関係から見ると、「ほとんど応じる」の方は、父親は男児より女児に対して、母親は女児より男児に対して応じる人が多い。「ときどき応じる」の方は、父親では男児より女児に対して、母親では男児より女

児に対して多い傾向がある。父親の場合 χ^2 検定においても有意差が認められ、父親は女兒の要求に対してはほとんど応じるが、男児に対してはときどき応じるということがいえる。

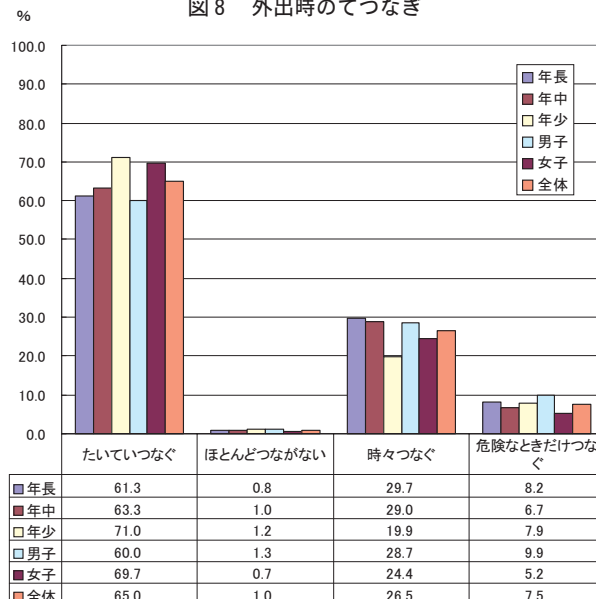
図7 子どものボディコンタクト要求に対する親の対応



(6) 外出時の手つなぎ

子どもが父母と外出するとき手をつなぐかどうかについて、「たいていつなぎ」を始めとする4つの選択肢(図中に記載)の中から該当する回答を求めた結果を図8に示す。年齢別、男女別ともに60%以上の親が外出時にはたいてい手をつないでおり、「ときどきつなぎ」を加えると、90%以上の親は外出時には子どもと手をつないでいる。特に、年少児と女兒に「たいていつなぎ」が多く見られる。男女間における χ^2 検定では有意が認められ、女兒のほうが男児より外出時には親とたいてい手をつないでいるといえる。

図8 外出時のてつなぎ



以上の結果から、ほとんどの親は子どもとのボディコンタクトをととても大切と認識しており、それは少なくとも子どもが小学生の間は必要と考えているようである。

親が子どもに行うボディコンタクトにおいて、筆者らの先行研究では、現在の学生たちが幼児の頃に親から受けたボディコンタクトの中で「おんぶ」や「だっこ」が最も多く、次いで「手を握りしめられる」、「頭を撫でられる」、「肩や背中を撫でられる」が多かった。今回の調査では、「抱っこ」は先行研究と同様に約60%程度であったが、「おんぶ」は「だっこ」の約半数となっている。「おんぶ」はわが国の伝統的な育児スタイルの典型⁴⁾であったが、最近では「おんぶ」をする母親はほとんど見かけなくなった現象を反映しているようである。

また、先行研究において「からだを強く抱きしめられる」や「ほおや顔にキスされる」、「ほおを撫でられる」は少なかった行為であったが、今回の調査では母親が行う行為では比較的多く見られた。

子どもに行うボディコンタクトについて父と母の違いは、「肩ぐるま」と「からだで支えるあそび」以外の行為では母親の方が多くしており、また母親の方に多い行為は「ほおや顔を撫でる」、「手を握る」、「ほおや顔にキス」、「からだを抱きしめる」である。父親の行為の特徴は子どもの求めに応じるものや、体力的に見て男性の方が困難ではない行為を父親の役割として行っているようである。一方、母親は父親よりはからだを密着させる行為を積極的に行っているようであり、乳児期からの育児における母子密着型の行為が幼児期でもかなり継続されているようである。他者への身体接触に関するジェラードの研究⁵⁾によれば、男女ともに異性の親しい友人からもっとも触れられやすく、次いで、同性の親しい友人、母、父の順であり、父からはほとんど手ぐらしか触れられていないことを示していることから、父親は母親ほどには子どもに対して密着型の身体接触をもたない傾向があると考えられる。

子どもが親にボディコンタクトを求めるとき、大半の親は子どもの求めに応じるが、ときどき応じる親も比較的多かった(母33.5%, 父36.4%)。この理由については尋ねなかったが、子どもの要求をすべて受け入れるとは限らないという親の姿勢が伺える。また、母親は女兒より男児に対し「ほとんど応じる」が多く、男児より女兒に対して「ときどき応じる」が多い。逆に父親は男児より女兒に対し「ほとんど応じる」が多く、女兒より男児に対して「ときどき応じる」が多い。したがって親は自分と同性のわが子より異性のわが子の方に寛容であると思われる。

外出時の手つなぎは、日常のさりげない行為としてのボディコンタクトであると考え、調査をしたが、年少児や女兒に「たいていつなぎ」が多かった。年少児の場合、安全面での考慮が大きな理由でもあると思われる。男女の比較で有意差が認められたことから、親の女兒に対する配慮も伺える。しかし男児は年長になるほど、外出時には親とは手をつながないで歩きたがる傾向があると推察できる。

2 家庭における子どもの遊び

(1) よくする遊び

家庭にいるときの遊びについて、ボール遊びを始めとする20種類の遊び(図中の掲載)について「よくする」と回答したものだけをまとめて図9-1, 9-2に示す。

60%以上の子どもがよくする遊びは「テレビやビデオを見る」、「お絵かき」、「本や絵本、まんがを読む」、「公園での固定遊具」、「自転車(三輪車を含む)」、「もの(ねんど、折り紙など)を作って遊ぶ」、「ブロックやおもちゃ(ミニカーを含む)」であった。また、40%以下の遊びは、「自然遊び(虫捕、魚とり、花つみなど)」、「ゲーム(テレビ、パソコン、ゲームボーイなど)」、「かごめかごめなど(手をつなぐあそび)」、「手遊びや指遊び」、「すもうやプロレスごっこ」、「鬼ごっこ」、「なわとび」、「ボール遊び」であった。年齢差の見られる遊びは、「ブロック遊び」、「ごっこ遊び(ま

ごと、お母さんごっこ、幼稚園ごっこなど)、「砂遊び」、「パズル遊び」では年少児の方が多く、「ゲーム」、「その他のゲーム(トランプ、かるた、すごろくなど)」、「なわとび」、「自転車」では年長児の方が多い。男女差の見られる遊びは、「人形(リカちゃん、ピカチュウなど)」、「本、絵本やまんが」、「ごっこ遊び」、「お絵かき」、「手遊びや指ずも」、「なわとび」で女兒のほうが多く、「ブロックやおもちゃ」、「ゲーム」、「すもうやプロレスごっこ」、「ボール遊び」で男児の方が多い。

図9-1 家庭でよくする遊び(年齢別)

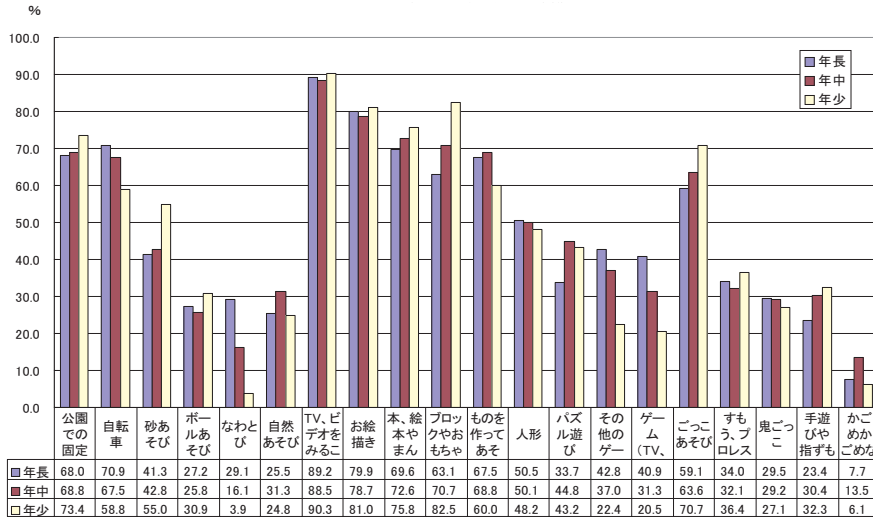
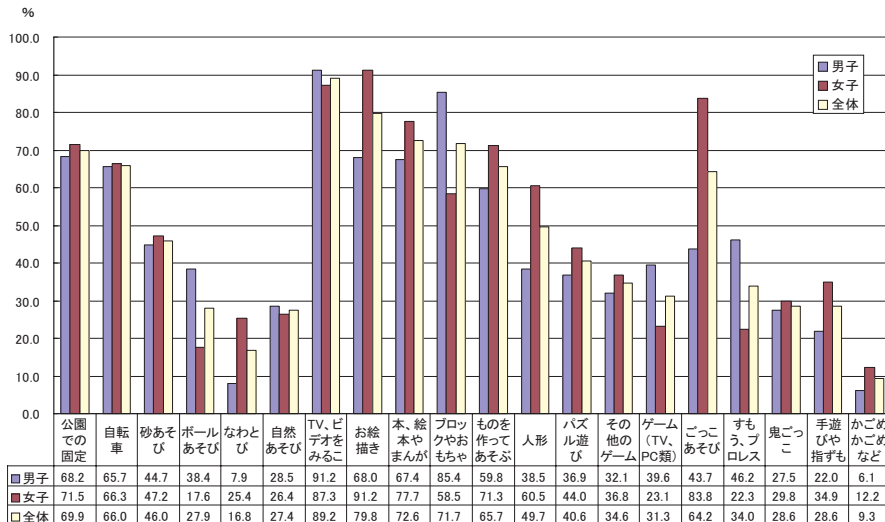


図9-2 家庭でよくする遊び(男女別)

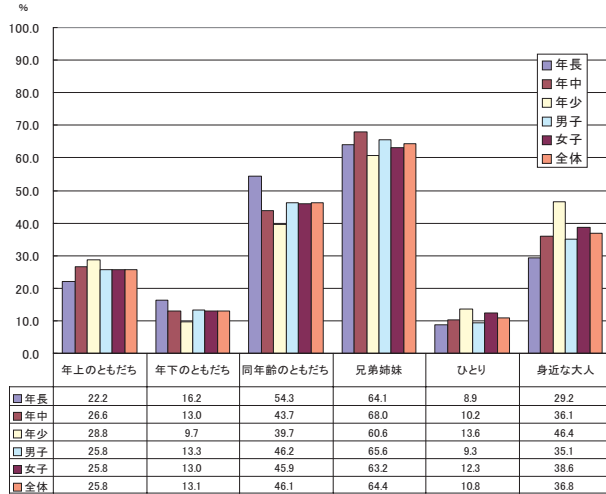


(2) よく遊ぶ相手

家庭にいるときよく遊ぶ相手について、「年上の友達」を始めとする6つの選択肢(図中の掲載)の中から該当する回答を求め、得られた回答をまとめ図10に示す。

最も多いのが「兄弟や姉妹」、次いで「同年齢の友達」であった。「身近な大人」も3番目に多い。

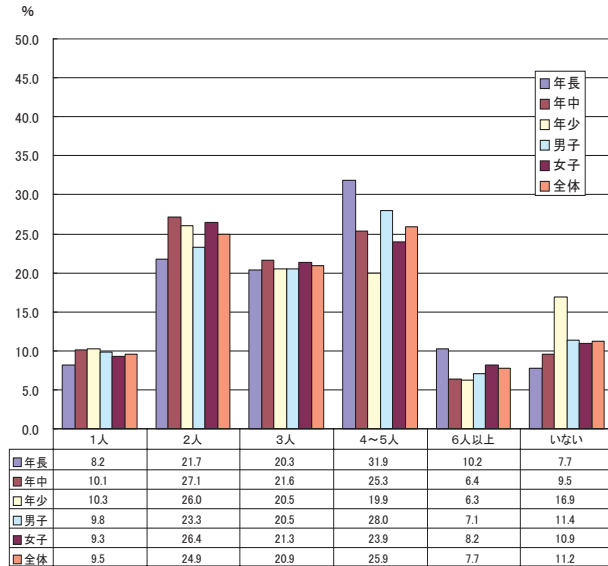
図10 よく遊ぶ相手



(3) よく遊ぶともだちの人数

家庭にいるときよく遊あそぶ友達の人数について、「1人」を始めとする6つの選択肢（図中の掲載）の中から該当する回答を求め、得られた回答をまとめ図11に示す。多い回答は「2人」、「3人」、「4～5人」、であり、「いない」との回答も10%程度みられる。年齢間における χ^2 検定では有意が認められ、特に年長児では「4～5人」が一番多いことから年長になるほど友だちの数が増えるといえる。

図11 よく遊ぶ友達の人数

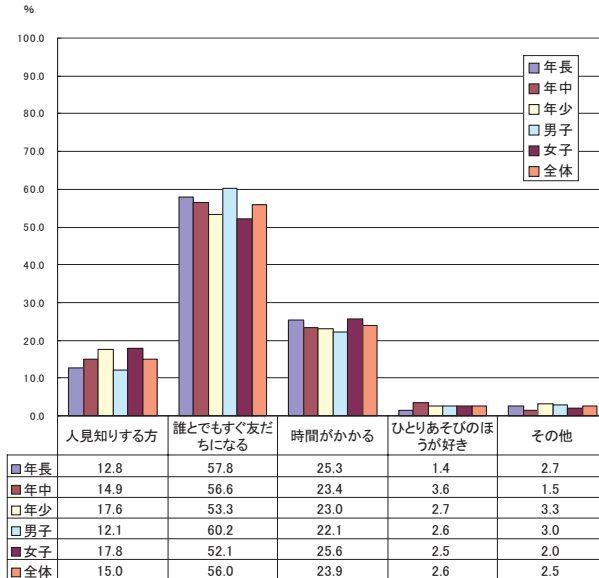


(4) 友だちのできやすさ

友だちのできやすさについて、「人見知りするほうである」を始めとする5つの選択肢（図中の掲載）の中から該当する回答を求め、得られた回答をまとめ図12に示す。最も多い回答は「誰とでもすぐ友だちになる」、であり、次に多いのが「友だちになるまでに時間がかかる」であった。約半数の子どもは「だれとでもすぐ友だちになれる」が、「友達になるまで時間がかかる」子や「人見知りす

る」子が全体で38.9%おり、その傾向は年少児の方に著しく、また男児より女児に多い（男児34.2%、女児43.4%）。男女間における χ^2 検定では有意が認められ、男児の方が女児より誰とでもすぐに友だちになれる子が多く、女児の方が友だちづくりに時間がかかる子や人見知りする子が多いといえる。

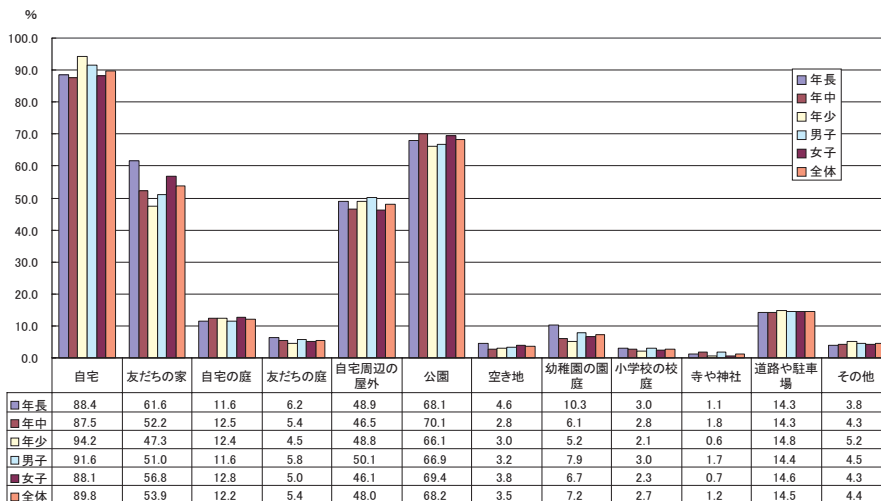
図12 友達になる



(5) 遊び場

家庭でのお遊び場所について、「自宅」を始めとする12の選択肢（図中の掲載）の中から該当する回答を求め、得られた回答をまとめ図13に示す。最も多い回答は「自宅」であり、次いで「公園」、 「友だちの家」、 「自宅周辺の屋外」が多い。

図13 家庭での遊び場

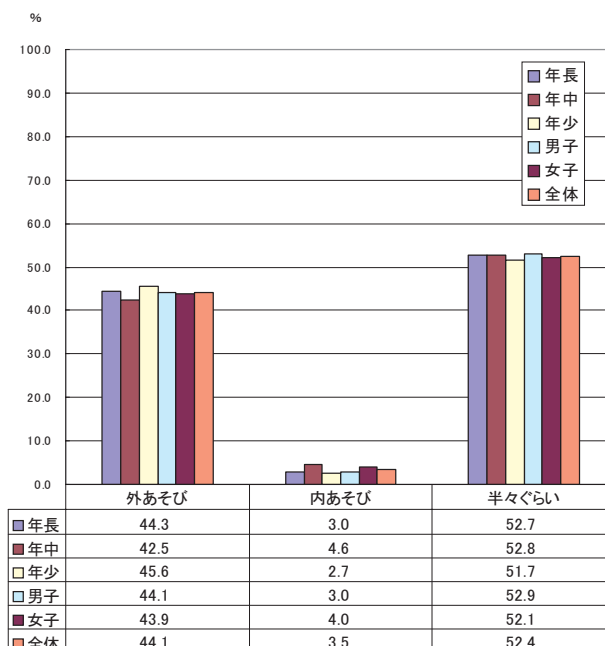


(6) 外遊びと室内遊びの志向

外遊びと室内遊びのどちらを好むかについて、「外遊び」を始めとする4つの選択肢（図中の掲載）

の中から該当する回答を求め、得られた回答をまとめ図14に示す。「半々ぐらい」との回答が50%程度であり、次に「外遊び」が多く40%以上であった。

図14 外あそびと室内あそび



子どもの遊びの変遷について、近藤は⁶⁾「昭和20年代から30年代にかけては外遊びが中心で、代表的な遊びは男女を通じて鬼ごっこ、かくれんぼであり、また男子では野球、女子ではなわとびとまりつきであった。30年頃からはテレビの視聴が増え、60年頃からはファミコンが普及し、子どもは家庭内に引き止められ、身体的な問題だけではなく人間関係まで問題になるようになった」と述べている。

かつての遊びは戸外で数人の子が活動的に遊ぶ群れ型が中心で、その典型はかくれんぼや鬼ごっこであり、おもちゃは手作りのものであった。ベネッセ教育研究所の子どもたちの遊び調査⁷⁾によると、現在では、放課後は自宅か友だちの家で特定の友だちともっばら「おしゃべり」をし、戸外で遊ぶときも活動的な遊びはせず「おしゃべり」をする。家に帰った後はテレビを見たり、マンガや雑誌を読むかテレビゲームをする。このように室内で1人で遊ぶような受動的で孤立型の遊びが多くなっていると報告している。

本調査からも、テレビやビデオの視聴が最も多く、お絵かき、ブロック遊びなどの室内遊びが多くされている傾向が示された。戸外遊びでは、1人でも遊べるような公園での遊具遊びや自転車のりが多く、友だちと一緒に遊ぶボール遊びや鬼ごっこなどはそれらの約半数であった。友だちの数も、2人、3人の子が約半数で、1人や「いない」子もそれぞれ10%程度いることから、3人ぐらいまでの友だちと遊ぶことが多いと推察できる。

外あそびと室内遊びのどちらを好むかについては半々という回答が多いが、外での遊びは群れて遊ぶよりは、2～3人までの友だちと固定遊具で遊んだり、自転車に乗るなど、協力や共同型の遊びではなく、いつでもやめることができる個人プレイである。しかし遊びの場は共有しそれぞれが同じ遊びをしているので、一緒に遊んでいるという連帯感をもつことができるのではないかと推察できる。

遊び場については、馬場⁸⁾は小学4年生を対象とした春休み中の遊びの調査で、家の中での遊びの割合が高く、男子の遊びではファミコンが圧倒的に多いことを報告している。幼児期にすでに外遊びの方を好む子より外遊びと室内遊びが半々くらいという子の方が多いこと、幼児期でも年齢が上がるにつれてテレビゲームをする子が増えること⁹⁾、小学生になればそれらが急増することなどから考えると、小学生になれば室内での遊びがいっそう増えるようになることが予測される。

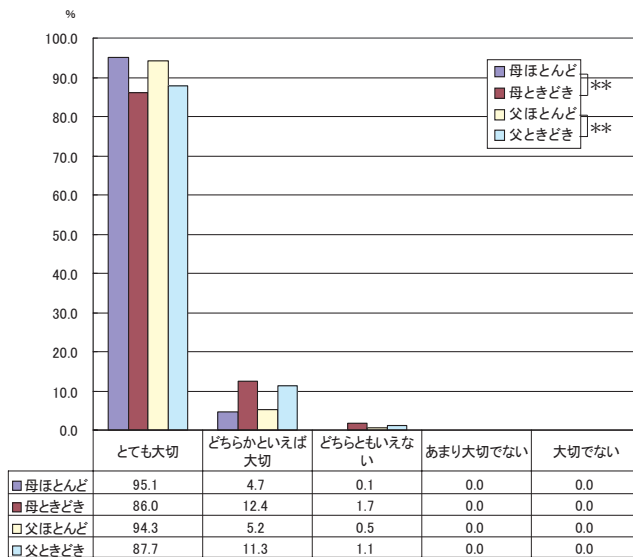
3 子どものボディコンタクト要求に対する親の対応のし方から見た親子のボディコンタクト

親のもつボディコンタクトの意識については、前掲図1の結果に示したように90%以上の親はスキンシップを「とても大切」と考えているが、子どもからボディコンタクトを求められたときの対応のし方（以下、「親の対応のし方」とする）については、「ほとんど応じる」との回答は母親で66.5%、父親では63.2%、「ときどき応じる」との回答は母親で33.5%、父親では36.4%（前掲図7）であり、養育態度に相違がみられた。そこで父母別に「ほとんど応じる」の群（以下H群とする）と「ときどき応じる」（以下T群とする）の群に分け、両群における親のボディコンタクトに関する意識や親子間のボディコンタクトについて比較し検討する。

（1）親の対応のし方と親のボディコンタクトの意識

図15は「家族が子どもと肌を触れ合うこと」について、親の対応のし方の違いによる回答を示したものである。H群とT群を比較すると、父母共にH群のほうが「とても大切」と回答した人が多く、「どちらかといえば大切」との回答は父母共にT群の方が多く、両群間には χ^2 検定で有意差（ $P>0.01$ ）が認められた。また、ごく少数ではあるが「どちらともいえない」の回答も父母ともにT群のほうが多かった。

図15 親の対応のし方とスキンシップへの意識

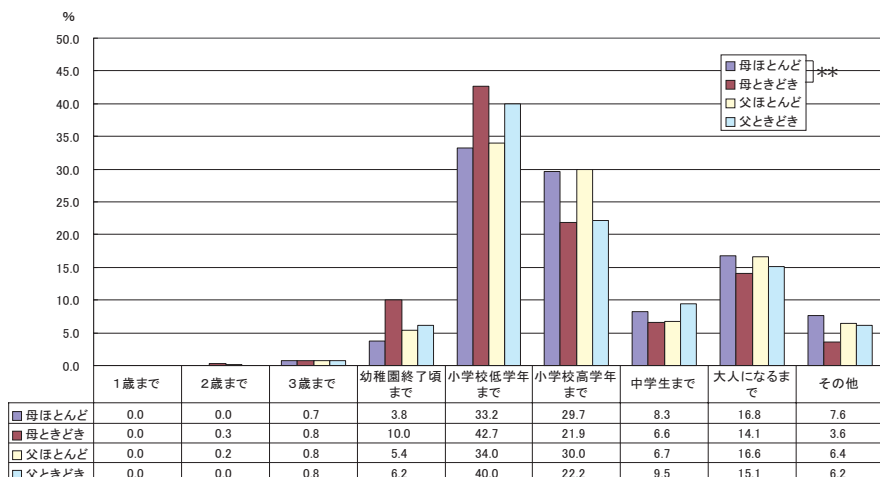


*** $P>0.01$

（2）親の対応のし方とボディコンタクトを必要と思う年齢

図16は「子どもとのスキンシップが必要な年齢」について、親の対応のし方の違いによる回答を示したものである。H群とT群を比較すると、「小学校低学年まで」の回答では父母共にT群の方が多く、「小学校高学年まで」の回答では父母共にH群の方が多かった。また、「大人になるまで」の回答では父母共H群のほうが多かった。両群間における χ^2 検定では母親の方に有意差（ $P>0.01$ ）が認められた。

図16 親の対応のし方とボディコンタクトを必要と思う年齢

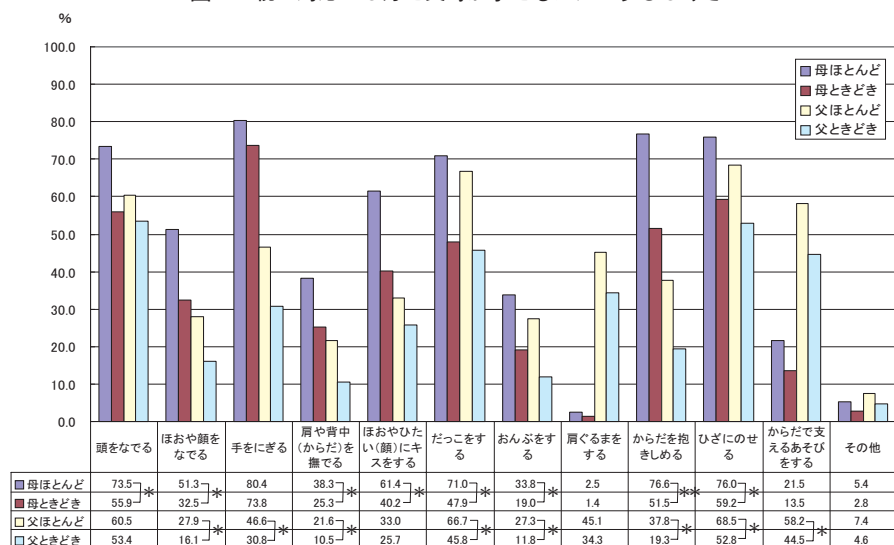


**...P>0.01

(3) 親の対応のし方と親が子どもにするしぐさ

図17は、「父母が子どもによくするしぐさ」を複数回答で求めたものを、親の対応のし方の違いで示したものである。H群とT群において比較すると、父母共に全てのしぐさでH群のほうが多くH群の親の方が子どもに対して積極的にスキンシップを行っているようである。また、両群の差の小さい項目は母親では、「手を握る」、「肩車をする」、「その他」のしぐさ、父親では「頭をなでる」、「ほおや額（顔）にキスする」、「その他」のしぐさであった。父母それぞれの両群間には χ^2 検定で有意差の認められた項目が多い（図中に表記）。

図17 親の対応のし方と父母が子どもにたいするしぐさ



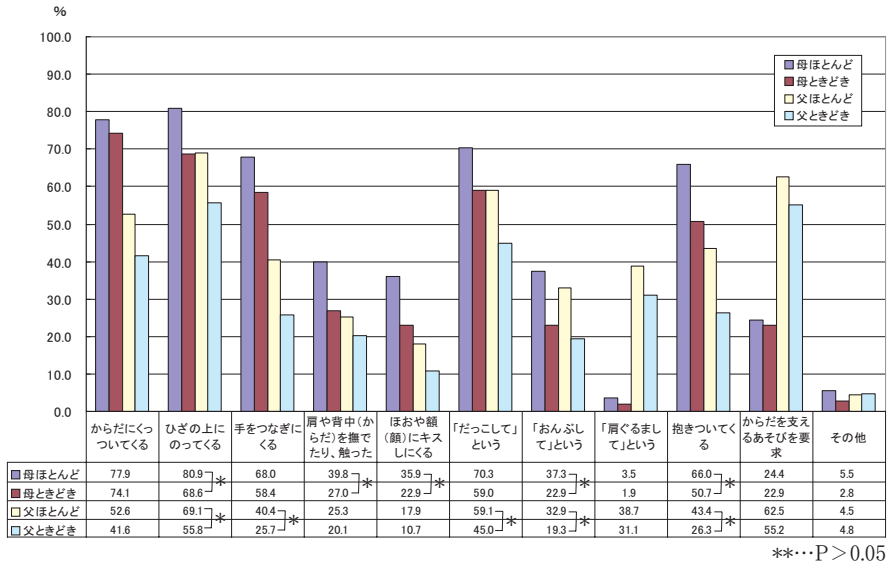
**...P>0.05 **...P>0.01

(4) 親の対応のし方と子どもが親に求めるしぐさ

図18は「子どもが父母に求めるしぐさ」を複数回答で求めたものを、親の対応のし方の違いで示したものである。父母共に、H群とT群を比較するとどのしぐさにおいてもH群の方が多かった。両

群の差が小さい項目は、母親では「からだにくっついてくる」、「手をつなぎにくる」、「肩車をしてという」、「からだを支えるあそびをしてほしいという」、「その他」であり、父親では「肩や背中(からだ)を撫でたりさわったりする」、「からだを支えるあそびをしてほしいという」、「その他」であった。父母それぞれの両群間には χ^2 検定で有意差の認められた項目が多い(図中に表記)。

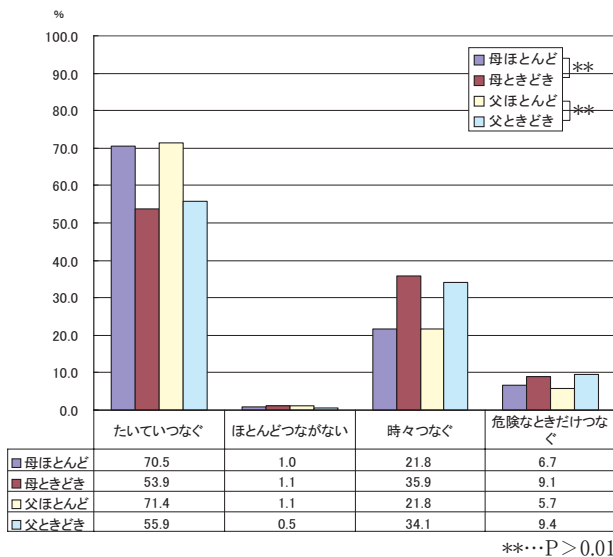
図18 親の対応のし方と子どもが父母に求めるしぐさ



(5) 親の対応のし方と外出時の手つなぎ

図19は「外出時の手つなぎ」について回答で求めたものを、親の対応のし方の違いで示したものである。H群とT群を比較すると、「たいていつなぐ」ではH群が多く、「ときどきつなぐ」ではT群が多い。また全体の回答は少数だが「危険なときだけつなぐ」でもT群の方が多かった。父母共に両群間における χ^2 検定で有意差(P>0.01)が認められた。

図19 親の対応のし方と外出時の手つなぎ



以上の結果から、H群とT群における親のボディコンタクトの意識や違いを検討し考察する。

両群ともに子どもとのスキンシップはとても大切と考えているようだが、T群の親のほうがやや消極的に回答している傾向が見られる。また、ボディコンタクトを必要とする年齢については、父母共にH群の親の方が子どもとのボディコンタクトを長期間必要と考えているようである。

母親が子どもに行うボディコンタクトはすべてのしぐさにおいてH群の方が行う割合が高く、またT群と比べて多くするしぐさは「ほおや顔をなでる」、「ほおや額(顔)にキス」、「からだを抱きしめる」であり、「手を握る」や「頭をなでる」しぐさよりも断然多かった。こうしたことからH群の親の方が、子どもへの愛情表現を密着的な身体行為で示すことが多いと考えられる。

ジェラードらによると、多く触れられる部位は母親からは腕や手、父親からは手、異性の友達からは顔や手、腕、上半身であった。このような観点からみると、H群の親の方が、大人の男女間での愛情表現に多いキスや抱擁などの身体表現が親子間でも同様に行っていることが伺える。父親の場合も同様の傾向が見られるが、「キス」は母親の場合ほど大きな差はない。また、父母共に子どもの要求にほとんど応じる親の方が、子どもも親にボディコンタクトを要求することが多いようであり、親の寛容な態度に子どもが十分甘えている様子が伺える。さらにH群の方が日ごろの外出時に手をつなぐ傾向が強く、日常的にボディコンタクトを行っているかと推察できる。

森野¹⁰⁾は親のスキンシップをとまなう養育行動は主として心にかかわり、落ち着きをもたらす機能をもつ「心的接触行動」と、身体にかかわり活動的で刺激や興奮をもたらす機能をもつ「身体的接触行動」の2因子構造を示しており、幼児は心的接触行動によって母親とじっくり触れあい、情緒を安定させるとともに他者の存在を理解すると述べている。

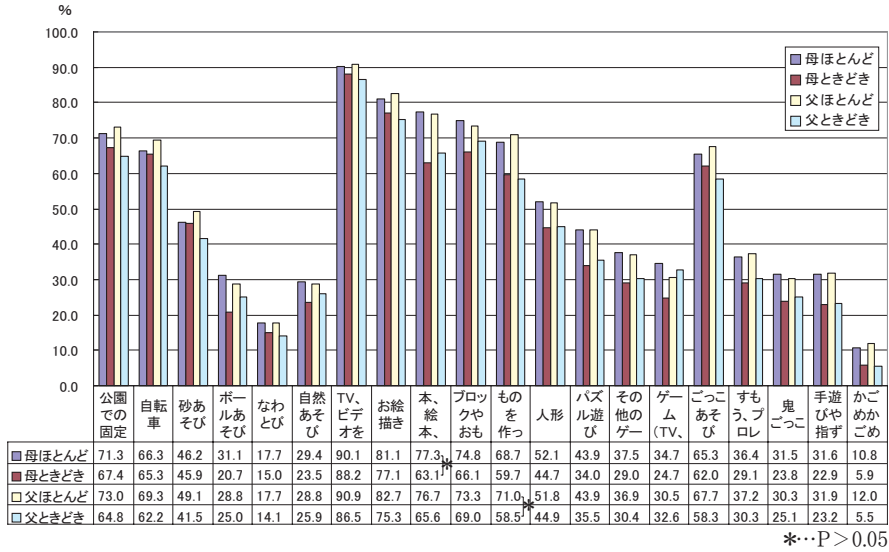
この場合、スキンシップを必ずしも身体接触を伴うものとは限らないと解釈しており、子どもとの会話や行動を共にすることを身体的接触と同様の価値を認めている。本調査からサンプリングされたT群の親もH群の親と同様にほとんどの人がスキンシップを大切と考えていることから、「心的接触行動」の方に重要性を認識しているものと推察する。

4 子どもとのボディコンタクト要求に対する親の対応のし方から見た子どもの遊び

(1) 親の対応のし方と子どもの遊び

図20は家庭でよくする遊びについて、親の対応のし方の違いによる回答を示したものである。母親の対応別に見ると、どの遊びもH群の方がT群より多い。両群の差が大きい遊びは、「かごめかごめ」、「ボール遊び」、「TVゲーム」、「手、指遊び」であった。ただし「かごめかごめ」のような遊びは園児全体でもよくする子は9.3%であるので、H群とT群の差は大きいとはいえない。また、父親の対応別に見ると、「TVゲーム」を除くすべての遊びでH群の方が多かった。両群の差の大きい遊びは、「かごめかごめ」、「手、指ずもう」、「なわとび」、「すもう、プロレス」などであった。50%以上の子がよく遊ぶ遊びに限定すると、母親の場合両群の差が比較的に見られる遊びは、「ものをつくる」、「本や絵本」、「人形」であった。また、父親の場合、「ものをつくる」、「ごっこ遊び」、「本や絵本」、「人形」であった。両群間に有意差の認められる項目は、母の場合の「本や絵本」、父の場合の「ものをつくる」であった(いずれも $P>0.05$)。

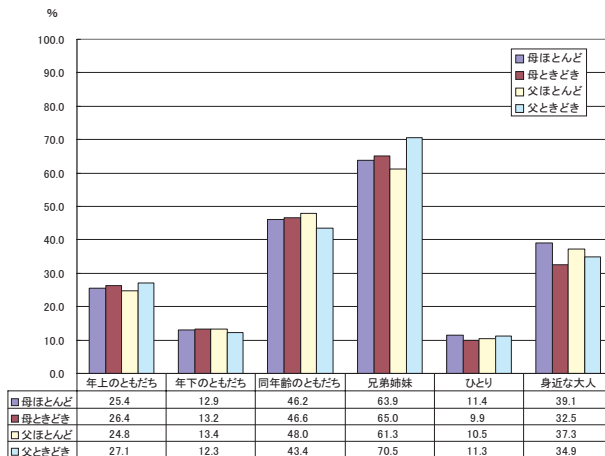
図20 親の対応のし方と家庭でよくするあそび



(2) 親の対応のし方と子どもの遊び相手

図21は家庭でよく遊ぶ相手について回答を求めたものを、親の対応のし方の違いによる回答を示したものである。母親の対応別に見ると、H群の方がT群より多い項目は「一人」、「身近な大人」であった。父親の対応別に見ると、H群の方がT群より多い項目は「年下の友だち」、「同年代の友だち」、「身近な大人」であった。したがって父母共にH群の方が項目は「身近な大人」であり、親が子どもの要求に「ほとんど応じる」親のほうが子どもとよく遊んでいるようである。

図21 親の対応のし方と子どものあそび相手

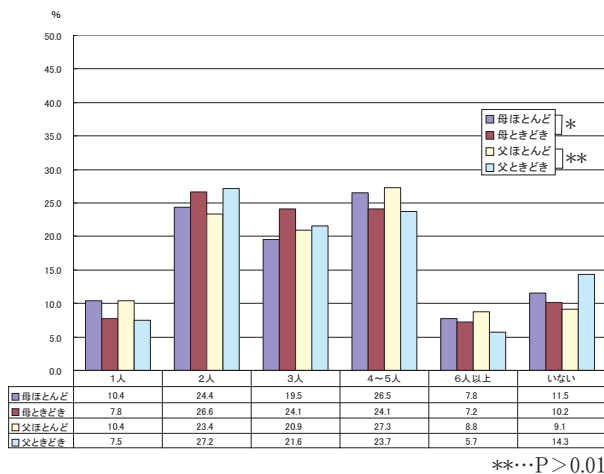


(3) 親の対応のし方と子どもの遊び友達数

図22は家庭でよく遊ぶ友だちの数について回答を求めたものを、親の対応のし方の違いによる回答を示したものである。母親の対応別に見ると、H群の方がT群より多い項目は「1人」、「4～5人」、「6人以上」、「いない」である。父親の対応別に見ると、H群の方がT群より多い項目は「1人」、「4～5人」、「6人以上」であり、 χ^2 検定で有意差 (P>0.01) が認められた。したがって子どもの要求に「ほとんど応じる」親の方が子どもの遊び友達が「1人」や、逆に「大勢」であるよう

である。

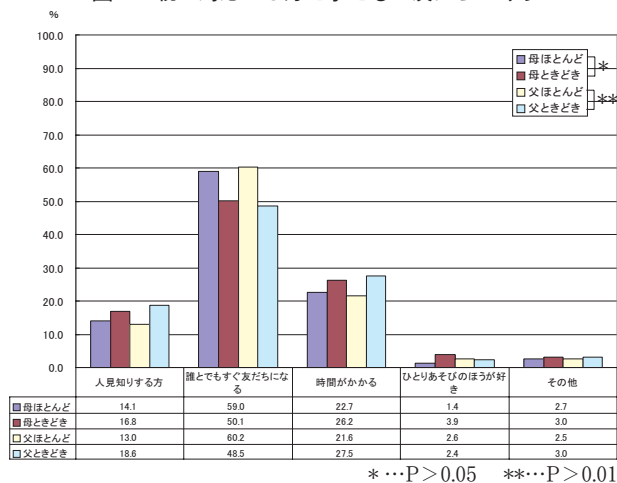
図22 親の対応のし方と子どもの遊び友達数



(4) 親の対応のし方と子どもの友だちのできやすさ

図23は子どもの友だちのできやすさについて回答を求めたものを、親の対応のし方の違いによる回答を示したものである。親の対応別に見ると、父母共にH群の方がT群より多い項目は「だれとでもすぐ友だちになる」であった。一方、「人見知りをする」や「友だちになるまで時間がかかる」ではT群の方が多く、親が子どもの要求に対し「ほとんど応じる」ほうが、誰とでもすぐ友だちになる子が多いようである。父母共に χ^2 検定で両群間には有意差が認められた(母P>0.05, 父P>0.01)。

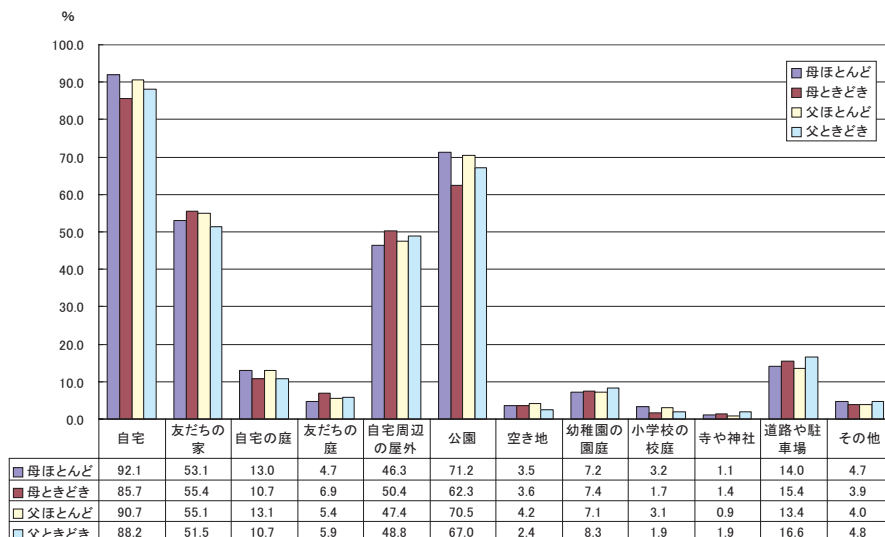
図23 親の対応のし方と子どもの友だちづくり



(5) 親の対応のし方と子どもの遊び場

図24は家庭で子どもがよく遊ぶ場所について回答を求めたものを、親の対応のし方の違いによる回答を示したものである。母親の対応別に見ると、H群の方がT群より多い項目は「自宅」、「自宅の庭」、「公園」であった。父親の対応別に見ると、H群の方がT群より多い項目は「自宅」、「友だちの家」、「自宅の庭」、「公園」などであった。したがって、父母共に子どもの要求に「ほとんど応じる」方が、自宅を中心に遊んでいる子が多いようである。

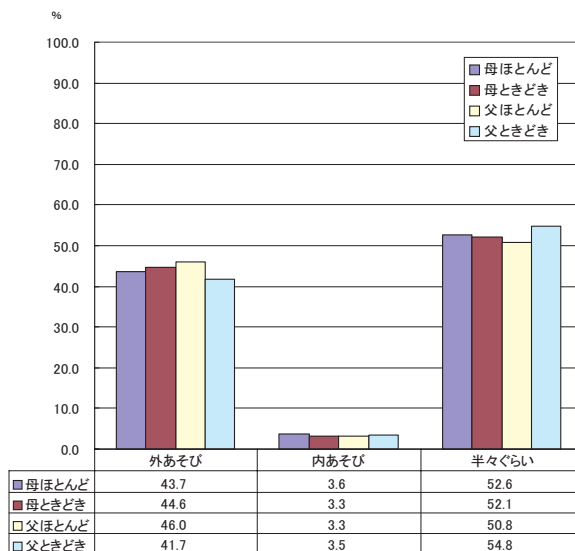
図24 親の対応のし方と子どもの遊び場



(6) 親の対応のし方と子どもの遊び志向

図25は子どもが外遊びと室内遊びのどちらを好むかについて回答を求めたものを、親の対応のし方の違いによる回答を示したものである。H群とT群の差はほとんどないが、外遊びにおいて父親のH群の方がT群より若干多い。

図25 親の対応のし方と子どものあそび志向



以上の結果から、H群とT群における子どもの遊びの特徴や違いについて考察する。

H群の方がT群より多い項目を中心に、50%以上の子がよく遊ぶ遊びや、遊び相手、友だちの数、友だちのできやすさ、遊び場などから考察すると、父母が子どものボディコンタクトの要求にほとんど応じる場合、子どもは大勢の子とすぐに友だちになれるの子が多い反面、友だちは1人だけと少ない子もいる。また、遊び場は自宅が中心であるが、外で遊ぶときは公園でボール遊びや鬼ごっこ

など大勢での遊びが多い。自宅での遊びは、ものづくり、本や絵本、マンガなどを読んだり、キャラクター人形を含む人形遊びが多い。また身近な大人を相手に遊ぶことも多い。

親との遊びについては、前掲図17によると、H群の父親はT群より「からだで支える遊び」を多くし、「肩ぐるま」も多くする。また、前掲図18によると、子どもが父親に「からだで支える遊びを要求」したりや「肩ぐるまをしてという」こともT群の親の場合よりもH群の親の場合に多い。

この点について川村¹⁰⁾は父親と子どもの遊びに関する事例研究において、子どもは父親のからだを使って創り出される「からだ遊び」を圧倒的に好むことを指摘している。「ヒコーキ遊び」のように名前の付く遊びもあれば、一回限りの遊びや名前のつきにくい遊びもあるが、子どもは父親のからだを使い自らの身体機能をいっばいに活用し、より高次な機能を発達させることができる。また、父親と共同して遊び、共同して喜びに達することは、ひとり遊びの喜びを超える学習でもあると述べている。これは、遊びの形（外面）ではなく中身（内面）であり、量ではなく質であると言及している。こうした経験は子どもの遊べる力を育てるための重要な糧となるであろう。

IV まとめ

幼稚園児の保護者を対象に、親子のボディコンタクトについての意識や子どもの遊びについて調査した結果を考察すると、次のような結論に達した。

1. 幼稚園児のほとんどの親は子どもとの肌のふれあい、すなわちボディコンタクトをととても大切と認識しており、それは少なくとも子どもが小学生の間は必要と考えている。最近では「抱きしめる」や「キスをする」などが増え、かつて多かった「おんぶ」は少なくなっている。子どもが親にボディコンタクトを要求する時、「ほとんど応じる」という親が多いが、「ときどき応じる」という親も比較的多い。父親は女のわが子に対して、母親は男のわが子には「ほとんど応じる」という人が多いが、同性のわが子には「ときどき応じる」という親が多く、概して親は異性のわが子には寛容な態度を示す。

2. 幼稚園児の家庭での遊びは、外遊びでは公園の固定遊具遊び、室内遊びではテレビやビデオを見る、お絵かき、本や絵本、まんがを読むなどが多い。手をつなぐ遊びやからだを接触させる遊びは相対的に少ない。遊び相手は年長児になるほど増えるが、「1人」や「いない」子も約20%いる。また、友だちとすぐに仲良くなれない子も半数ぐらいいて、友だちづくりの苦手な子が幼児期からすでに多いことがわかる。外遊びと室内遊びのどちらを好むかについては「室内遊びを好む」子は圧倒的に少ないが、実際によくする遊びの種類からみると室内遊びの方が多く回答されている。

3. 子どものボディコンタクト要求に対し、親の対応のし方の違いから「ほとんど応じる」人をH群、「ときどき応じる」人をT群として、比較検討した。H群の親の方が、スキンシップを「とても大切」と考え、スキンシップが必要な年齢も高く考えている。子どもに対するボディコンタクト行為はすべてのしぐさにおいて多く行っており、また子どもからのボディコンタクト要求も多い。外出時には手をつなぐことも多く、日常的にボディコンタクトを多く行っている。

4. H群とT群の比較から、H群の子どもはどの遊びも多く行い、だれとでもすぐ友だちになれる子が多いが、友だちの人数は少ないか多いかに分かれる。したがって、遊び相手は「1人」や「身近な大人」が多く、遊び場は自宅が中心である。また、父親は「からだで支える遊び」を積極的に子どもにしているようである。

最後に、多田¹²⁾は人に「触れる」という行為には、他人をインボルブする、他人と濃密な感情をもつという意味がある、だから愛情の表現としてこれが使われるが、愛情という狭い範囲ではなく……、心にも触れることであり、触覚こそもっともたしかかな心の触れあいになり、「心に触れる」ことは「身体に触れる」ことに通ずる、と述べていることを添えておく。筆者らも同様に、幼児期にお

ける親子のボディコンタクトは、子どもの心の育む重要な糧であると考ええる。

参考文献

1. 武藤安子編著「発達臨床－人間関係の領野から－」建帛社 1993 p. 50
2. 宮下恭子 蒲真理子「幼児のボディコンタクトを伴う遊びに関する研究Ⅰ－学生のボディコンタクトを伴う遊びに関する意識調査を中心として－」東京成徳短期大学紀要 第34号 2001 pp. 67-78
3. 平井タカネ「リズム運動，ボディワークの精神心理学的研究－リズムカルなボディコンタクトについて－」平成9年度～平成11年度科学研究費補助金研究成果報告書 2000
4. 川村晴子 増原喜代 中西利恵 内山明子「子どもの育ちと遊び」朱鷺書房 1997 pp. 96-98
5. 大坊郁夫「しぐさのコミュニケーション」サイエンス社 2000 pp. 47-50
6. 近藤充夫「子どもの生活と運動体験」体育の科学 Vol. 38 No. 8 1988 pp. 572-573
7. ベネッセ研究所「子どもたちの遊び」ベネッセコーポレーション 1999
8. 馬場桂一郎「今、子どもたちの遊びは」体育科教育 1999 12 pp. 17-20
9. ベネッセ研究所「幼児の生活アンケート調査報告書」ベネッセコーポレーション 2000
10. 森野美央「親子のスキンシップと幼児の攻撃性に関する研究－攻撃性への対応を模索する視点から－」日本保育学会 第54回大会号 2001 pp. 490-491
11. 前掲書 4. pp. 84-91
12. 多田道太郎「しぐさの日本文化」筑摩書房 1982 pp. 62-63

追記 本研究を進めるにあたり，東京成徳短期大学附属幼稚園，東京成徳短期大学附属第二幼稚園，かわい幼稚園，第二かわい幼稚園，みどりかわい幼稚園の先生方，園児の保護者の方々には多大なご協力を頂きましたことを感謝いたします。